

日本ではグループホームなどをつくるというと、地域の住民とぶつかる。イタリアにはそういう衝突がないのですか？

<トリンカスさん>

もう1つの例としまして、中産階級が入っている、地域のまづまづエレガントなマンションの一室に「カーサ」（もともとは「家」という意味ですが、ここではケア付き共同住宅のこと）を作るという話になった時に、全ての住民（管理団体）が反対しました。家族会としては、実際にそこに入る人たちが、家賃はもちろん問題無く払っていきけるし、契約もしっかりしたものを結んでいるし、当然1人の人間としての権利を有しているわけですし、普通の生活を送っていくべき人びとであるという事をしっかりと説明して、説得して、住民が納得したということがありました。あれから3年が経ちますけれども、問題は起きていません。

<大熊さん>

私の取材体験からしても、精神病の方が、いつも目の前で当たり前のように存在する時と、ある特別な場所に集められているとでは、住民の反応は違うものです。やっぱり、1ヶ所に集める事が、諸悪の根源です。これが僕の1つの結論です。

なぜ今回の講師3人の中に当事者がいないのですか？イタリアには患者会はあるのですか？

<トリンカスさん>

私が所属するサルデーニアの家族会は、家族と当事者と両方で構成されています。家族会の中に当事者の方も一緒に入っていて、そこには当事者とそれ以外という区分はありません。当

事者だけの組織もあるのですが、そんなに全国規模には広がっておらず、ここ数年の話です。

<ジャンニケッダさん>

バザーリア記念財団ではここ2年ぐらいは当事者会の方々とよくコンタクトを取り、一緒にプロジェクトを進めています。

実際どのような活動をしているかというところ、当事者の方々と一緒に高校を訪問するというプロジェクトを行っています。当事者の方々の中で結構若い方が、インターネットラジオを開設していて、そこで一緒に活動して（働いて）いける仲間を探すために、学校で仲間を募っているという状況であります。

イタリアでは1960年代位から、当事者が当事者の為の社会協同組合を作って、そこで就労する形を取ってきたという歴史があります。その活動は労働者としての権利の擁護であり、働く事と生活を結びつけて考えるというのがポイントでした。その当時から北イタリアが中心で、トリエステをはじめ、トリノやミラノで協同組合ができていきました。これがまた当事者の活動のためにも大きく影響してきていたということでもあります。

そして何故ここに当事者が1人もいないのかという問題ですが、我々には当事者の方を雇ってここに一緒に来てもらうためのお金がないという理由があります。今回来ている3人に関しての色々な経費に関しましては、全て自分たちが払っています。このバザーリア記念財団というのは、非常に強い力を持ち、非常にキッチリした仕事をしている所ではありますが、非常に貧乏な財団でもあります。薬品会社からの援助とかを一切受け取っていませんので。

大熊さんとも話をしているのですが、もし可能なら、イタリアから当事者のグループが日本に来たり、日本の方々のグループにイタリアに来てもらったり、そういうことを行いたいのです。ただ、当然お金がかかる話ですので、どこかスポンサーがいれば実現可能ではないかという風には考えています。

どうもイタリアの家族会は活発そうである。日本は立ち上がろうとしてもなかなかみんながついてこない。どうしたらよいのか？

<トリンカスさん>

イタリアの家族会というのは、25年の歴史を持っています。その中で少しずつ大きく強くなってきました。25年前は、当然参加人数も少なく、家族会がある州も非常に少なかったです。それで、以前からあった家族会同士で行ったり来たりしながら、講演会や会合を各地で開きました。その土地の家族会を立ち上げていこうとしているようなグループに対しては、いろいろな援助をしてきました。

また、その中で非常に重要だったのは、精神科医のサポートでした。当然、いろいろな経験を持っていていろいろな観点から医療的な観点からもみてくれました。そういう人たちと協力をし、いろいろな仕事を毎日毎日繰り返して、細かいサポートや活動を行っていく事によって最終的にこのように大多数の家族会をネットワークで繋いで全国的な連合にするという現在の形にまで至る事ができたのです。

やはりいろいろな意味で、様々な方面から刺激を与え、促進していくことが大きな変化へと繋がっていくと考え、それを実践してきました。

そして政治的な側面も忘れる事ができません。実際に中央政府に対しての働きかけも行いましたし、様々な専門のジャーナリストやコメンテーターとコンタクトを取りながら、実際に国会にも乗り込んで行って、「あなたと話したい」といったような、そういう積極的な働きかけをする中で、やっと今のような、大きな一石になったということです。

まだまだ新しく立ち上がって間もないような家族会もありますけれども、今後も増えて、さらに大きくなっていくと考えているところです。

もう1つ重要なのは、権利についてです。私たち家族会は、いろいろな活動をしていくなかで、法律をしっかりと理解していくことをします。

権利に対する法律を家族に広めるための教育の場を設け、多くの人に知らせていくことはとても重要です。

職員が地域に出るときは、病院で勤めるのは違った仕事になるはずですが、職員にどうい教育をしたのでしょうか？

<ロザーヴィオさん>

まず精神病院から地域に移る前に、病院の中において、地域でのサービスを予想しながら、職員のグループを作りました。グループには地域で暮らすためにどういうサービスをしていかなければいけないのか、具体的に何が必要になるのか、当事者を交えて話し合い、計画をたてさせました。例えば、家具などの必需品を調達するために、病院から出かけることが必要ときもありました。精神科医にしても、看護師にしても最初はいろいろと当惑していました。

最後に・・・

<大熊さん>

昨日、京都の民間の精神科病院を見せていただきました。病棟を見終わった後に3人が病院長を前にして語った感想を紹介します。訪問した病院の名誉のために言いますが、これは明らかに日本ではハイレベルな精神病院での訪問記である事を心に留めて、聞いてください。

ロザーヴィオさん談

日本の礼儀正しさ、清潔さは日本の精神病院の中にもみられました。でも、美しい精神病院はむしろ目くらましになるのです。どうみても精神病院は街の一部とは言えません。それに精神病院という体制が精神疾患を慢性化させてしまうのはもう否定しようがありません。私はかつて精神病院に働いていた事がありますから、ここで働く事の難しさを知っているつもりです。でも、精神病院の外で働いていますと、自分に

は思いのよらない能力がある事を発見できました。そこで、これは私の経験に基づく提案ですが、これからの財源の使い方としては病棟を建設する事は止めて、病院の外に金を使うべきです。訪問した病院のデイケアは下の階に押し込められるように備えてありました。これは駄目です。病院の外で人に見えるようにすべきです。

トリンカスさん談

私は世界の色々な国の精神病院を見てきましたが、日本の病院は綺麗で清潔で、その限りでは良い印象を受けました。でも、そこに見た入院者の皆さんの眼差しは他のどの国の精神病院で見たものとも同じで、悲しみと諦めの入り交じった表情でした。日本の精神保健問題での解決方法は間違っています。精神病院とは違ったやり方があるのを知ってください。

マリアグラツィアさん談

京都府250万人の住民に対して6500ベッドが用意されている事にショックを受けました。この3500ベッドを人手とお金を全く違うやり方に使えたら、もっと遥かにマシな事ができるはずですよ。こういう言い方は精神保健に携わる人を侮辱したかもしれません。プロとしての能力を蔑ろにしたかもしれません。訪問した病院で働く人々にはモチベーションや能力が沢山備わっている事はよく分かりました。でもこの人的資源を地域に出したらもっと大きな事ができるはずですよ。精神病院の経営者に反抗する事は確かに難しい事でしょう。でも説得は不可能ではありませんよ。

<大熊さん>

実は今回、彼女は僕にTシャツをお土産に持ってきたのですが、そのTシャツには、何と書いてあつと思います？

“chi lotta può perdere,

chi non lotta ha già perso”

闘う者は負けるかもしれない。
しかし、闘わない者は
すでに負けているのだ

これが今日の講演会の結論です。